

## 「邪馬台国時代の千曲川流域と周辺世界」

講師 明治大学教授 石川日出志先生

善光寺平（長野盆地）を含む千曲川流域に森將軍塚のような大古墳ができる背景を、魏志倭人伝に出てくる邪馬台国とその同時代の千曲川流域の弥生社会の在り方の中に探ってみる。

### ●邪馬台国とは

魏志倭人伝によると、女王・卑弥呼（ヒミコ）が統治する邪馬台（ヤマタイ）国が二十八の国（クニ）を統括した倭国の中心であり、邪馬台国は中国王朝の中枢部と交流があった。同書には、倭国には、邪馬台国と敵対する狗奴（クナ）国の存在も記されている。邪馬台国の時代は卑弥呼が擁立された180年代末から卑弥呼が没した3世紀末中ごろであり、中国三国時代の最も勢力のある魏（ギ）と関係をもつことになる。3世紀（239年）には魏の皇帝に使いを出して、倭国の女王であるとの称号をもらった。



講演する明治大学教授石川日出志先生

邪馬台国はどこにあったのか、という問題は江戸時代からある論争だが、現在も決着がついていない。概して、古代史ファンは九州説が多く、考古学者は畿内説が多い。私（石川）は邪馬台国の所在地は九州ではありえないと考えるが、九州説と畿内説の論争は不毛な論争である。倭人の世界が強大な中国の王朝と交渉する段階にあったということを認識することが重要である。

### ●弥生時代の九州

伊都（イト）国は魏志倭人伝の中で重要な国（クニ）であるとされており、女王国である邪馬台国に従っている、と魏志倭人伝に書かれている。考古学の調査で、前漢の時代の伊都国の王墓と考えられる墓が3基（三代にわたって）見つかっている。

50年から100年の年代差があるものであり、いずれも江戸時代に見つかったものであるが、古いものは紀元前1世紀のものであり、鏡をたくさん副葬している。次に古いものは1世紀前半のものでやはり鏡を多く副葬している。もっとも新しいものは、2世紀のものともみ

られ、48面の鏡が平原（ヒラバル）遺跡から出土している。

また、伊都国と並んで勢力があった奴（ナ）国の大墓も確認されている。伊都国、奴国を従える邪馬台国が九州にあったとすると、伊都国、奴国の王墓を凌ぐ、またはそれに相当するような王墓が存在するはずであるが、九州では見つからない。したがって、邪馬台国は九州ではありえないと考える。

### ● 国宝の金印

江戸時代に発見された「漢委奴国王」の金印は、紀元57年に後漢の光武帝が奴国に送った金印であるとするのが定説である。江戸時代以来偽物であるとする説があり、近年は偽物説も強く主張されているが（三浦佑之氏他）、近年篆刻の研究が進み江戸時代に漢の時代の字体を偽造することは無理であると考えられること、鈕の部分を駱駝（ラクダ）から蛇（ヘビ）に作り替えている可能性がある（大塚紀宜氏）ことなどから、本物であることは間違いないだろう。

これまで話した、伊都国・奴国の王墓、金印の話はすべて九州のことであるが、いずれも邪馬台国の少し前の時代の話である。この話だけを聞くと、邪馬台国も九州にあったように思える。

しかし、邪馬台国の時代、九州では大陸との交渉を示す考古学的な資料がたくさん

発見されるが、本州島、四国などとの関係を示すものがあまり見当たらない。また、九州を一つに束ねていこうとする様子が、考古学的には確認できない。ところが、邪馬台国の時代は、倭人の社会が統括され、倭国としてまとまっていく時代である。しかも中国地方、近畿地方と交渉している様子も認められない。

同時期、中国地方では、遠隔地の有力者と手を結ぶ動きがあったことを示す考古学的資料がある。吉備の楯築（タテツキ）、出雲の西谷の墳墓で、それぞれ吉備、丹後、若狭地方の王が葬儀に参列していた様子が想定できる。その後、遠隔地の有力者と手を結ぶ動きは、この後畿内にも広がっていく。邪馬台国がどこにあったかは、決着はついていないが、3世紀の終わりには（邪馬台国の時代のすぐあとの時代）、畿内に政治の中核があるということが、明らかとなってきている。こうしたことを考えると、邪馬台国が、九州にはないと考える。

### ● 千曲川流域の弥生時代

邪馬台国は、倭人の時代から倭国の時代へと転換していく時代である。邪馬台国の時代、千曲川流域の様子はどうかということを見ていく。



国宝の金印が本物であると力説する石川先生

まず、弥生時代中期の紀元前 1 世紀、長野県最大の弥生時代の集落である松原遺跡が成立し、千曲川流域には十数か所のムラが数キロおきに点々と存在したと想像できる。上越市吹上遺跡で作られた玉類が千曲川流域に持ち込まれていることもわかってきている。2007 年、中野市柳沢遺跡で青銅器が発見された。この発見により紀元前 1 世紀に信濃では、畿内や九州との交流があったことが判明した。

千曲川流域では、弥生時代後期にはいると（AD1 世紀）、遺跡数が激減する。関東、北陸などでも同じ状況で、東日本一帯で劇的に人口の減少が起きている。気候の変動のためであるとする説もあるが、その原因は不明である。

後期後半（2 世紀代）には環濠集落が再び出現し、大きなムラが再度つくられるようになる。西日本とのつながりも再び見えてくる。弥生中期にみられた環濠集落は、いったんなくなるが、篠ノ井遺跡などでは、2 世紀に環濠集落が出現している。中野市のがまん淵遺跡のような、丘陵の上に集落を築く防御的な性格を持つ高地性集落も現れてくる。がまん淵遺跡では、善光寺平在地の土器に加え、北陸地方の土器に似たものが出土している。2 世紀になると、善光寺平の他の遺跡でも、北陸地方の土器が見られるようになり、大きな墓が作られ、鉄の武器が埋葬される遺跡が現れてくる。2 世紀は邪馬台国の時代が始まる時期である。

木島平村の根塚遺跡は、墓に鉄の武器を埋葬する例で、渦巻文がある朝鮮半島製の珍しい形の鉄剣が出土している。朝鮮半島の伽耶（カヤ）地域の鉄剣であると考えられ、日本では類例がない。根塚遺跡の鉄剣は、その特殊性から特注品であるとする説もある。この他に、大陸とのつながりを示す資料が最近見つかってきている。佐久平では、弥生時代後期の集落が沢山調査されており、佐久市北一本柳遺跡では朝鮮半島釜山周辺で作られたと考えられる鉄斧が出土している。上田市上田原遺跡の鉄銚、長野市浅川端遺跡の青銅製の馬形帯鉤（タイコウ）など、2 世紀になると、大陸で作られた金属器が千曲川流域にみられるようになる。馬形帯鉤は、朝鮮半島では各地に多く発見されているベルトの留金（バックル）であるが、浅川端遺跡の他、岡山県などで発見されているのみで、東日本では唯一の例である。このような大陸とのつながりを示す文物が善光寺平や千曲川流域から多く発見されるような状況は、かつては想像すらできなかった。

## ●まとめ

千曲川流域では、2 世紀になると、防御性のある集落が出現し、大陸系の文物が突如現れ、社会の転換期を迎えているとみることができる。善光寺平では、山城のような高地性（の防御的）集落であるがまん淵遺跡や、篠ノ井遺跡群などの平地の環濠集落が 2 世紀代にみられるようになる。これは、社会的緊張が生じてきたことを示している。

西日本では紀元前後から高台に環濠をもつ集落が出現し、2 世紀にはいると、北陸一帯に高地性の防御的集落が出現する。妙高市の斐太遺跡などでは堀を巡らせた、かなり大きな集落が高台の上に造られる。これらは、社会的な争いに備える集落である。がまん淵遺跡

の高地性集落、篠ノ井遺跡群の環濠集落は、西日本で起こっている動乱を信濃の人々が意識していたことを示している。

弥生時代後期、北陸地方でもたくさんの金属器が出土している。かつては、九州・畿内を通じて金属器が流通していると考えられていたが、近年は大陸と北陸地方が直接物資を流通させる関係にあり、信濃で出土している金属器も北陸を通じて直接入ってきていると考えられる。根塚遺跡の鉄剣などは、朝鮮半島に特注品として作ってもらったものかもしれない。また、北陸を通じて千曲川流域に入ってきた大陸の金属器は、碓氷峠を越えて、関東地方にも普及していく。

邪馬台国の時代、西日本では、大陸と関係を保ちながら社会の統合が進んだ。北陸では、大陸とも関係を持ちながら、各地が連携していた。この連携が、千曲川流域にも何らかの形で及んでいたと考えられる。千曲川流域の弥生時代後期の社会は、北陸とつながりを持つ中で成り立っていた。そのつながりは、北陸を通して西日本に通じるものであった。

4世紀の古墳時代に入って、また新たな枠組みで、善光寺平の社会が築かれていく。弥生時代後期の善光寺平は、北陸地方との関係の中で成立していたが、4世紀になると、近畿地方の豪族を中心とした、全国的な枠組みの組み換えがおこなわれる。弥生時代後期とは異なった社会の枠組みが作られ、その中で畿



熱心に話を聞く約 200 名の参加者

内と強いパイプを持った森將軍塚古墳のような大規模な古墳が築かれていく。森將軍塚古墳を出現させた善光寺平の古墳時代の社会の基礎は、2世紀から3世紀の弥生時代後期の人々が北陸地方を通して西日本の人々との関係を築き上げていたことにある。4世紀になり、畿内との強い関わりをもった森將軍塚古墳が築かれるようになり、新たな時代の幕開けとなった。  
(平成 27 年 1 月 25 日 (日)、 於 JAグリーン長野グリーンパレス)